日本語書記史を観点とする日本語話者の論理意識に関する試論
―出来事に対する時系列連鎖型の認識傾向に注目して―

福山市立大学　　森　美智代
新潟大学　　磯貝　淳一

キーワード：『三宝絵』、接続語、古典教材

１、研究の目的と方法

学習者の言葉の力の育成を考える際、報告書や意見文などのプレゼンテーションで必要な「伝達の言葉」を磨く教育が必要とされる一方で、自らの思いや考えを言語化しながら深めていく「思考の言葉」を磨く必要がある。本稿が目指すのは、日本語を用いて思考を行う者（本稿ではこれを仮に「日本語話者」と呼ぶ）にとって採りやすい思考のあり様があるとしたらどのようなものであるのかを日本語書記史の知見に拠って明らかにすることである[1]。

グローバル化に適応するための能力の育成が求められる昨今、教育現場では、結論先行型の論証スキルやデータに裏付けられた主張の提出、より合理的で無駄のない論証の力の育成に向けた指導法の開発が進められてきた。

しかし、国語教育学研究において、多くの先行研究が依拠するのは、欧米由来の論理学や認知心理学の知見であり、それらは元来、日本語ではなく諸外国の言語を対象として論じられたものである。加えて日本語自体を対象とする日本語学の知見でさえも、その多くが共時的記述に基づく現代日本語の特質を描いており、歴史的変遷を背景とした現代の言葉の問題という観点はほとんど考慮されてこなかった。これに対し、歴史的な観点に立つことで、一つの可能性として、日本語話者の思考のあり様が結論先行型に代表されるような近代的な文章、いわゆる論理的な文章とは異なる形式の文章と親和性を持つということもあろう。そうすることで、従来の論理学や認知心理学、現代語を対象とした日本語学に並び立つ知見を、日本語の歴史的な観点により提出することも可能なのではないだろうか。

そこで本稿は、現代日本語に（直接的ではないが）連なる王朝和文体の書き言葉確立直前頃の言語状況に注目し、平仮名文・片仮名文・漢字文といった表記様式の違いを越えて共有される書記のあり様から、日本語の書き手に通底する論理意識の一端を明らかにしたい。それによって日本語話者にとって得手な思考のあり様が存在するのか否かを探り、思考に関する領域における日本語書記史記述という道筋からの究明の可能性、さらには国語科の教育内容を考察する上での日本語書記史の有効性を提示する。

２、問題の所在

本稿が考察対象としている論理意識について、国語教育学研究では、「論理的思考」に代表される説明文の読解指導（現行学習指導要領の区分では「読むこと」の領域）や、ディベートのような討論の指導（「話すこと・聞くこと」の領域）、あるいは意見文や主張文といった作文指導（「書くこと」の領域）などを中心に議論が行われてきた。中でも、説明的文章の領域における研究の蓄積が顕著である。

特に論理的思考に関する研究においては、論理学や分析哲学を背景とした論証に関する研究と、発達心理学や認知心理学を背景としたメタ認知に関する研究とを指摘することができる[2]。

論証に関する研究としては、分析学者トゥールミンのモデルが多くの研究に影響を与えてきた[3]。井上尚美（1998）では、議論や論証の型として演繹型と帰納型とを指摘した上で「どちらの型の場合でも、受け手を納得させるために必要不可欠なのは、結論となる主張とそれを裏づける理由やデータや条件である（井上、1998、p.68）」と述べている。加えてトゥールミン・モデルを提示することで、データから主張へと至る際の理由だけでなく、その理由の裏づけが重要であると説明している。

メタ認知に関する研究については、メタ認知能力の育成を掲げ、「読むこと」の領域を中心に広がりを見せてきた[4]。河野順子（2006）では、メタ認知を「メタ認知的知識」と「メタ認知的経験」とに分け、特に国語教育研究においては「メタ認知的経験（感情）を伴ったメタ認知的活動（メタ認知的モニタリング、メタ認知的コントロール）（河野、2006、p.75）」が重視されてきたことを指摘している。

これらの先行研究は、論理意識を考察していく上

で重要な知見であり、さらなる解明が求められる。それに加え、日本語自体を歴史的な観点から考察することで、日本語話者に固有の思考のあり様からの論理的思考の解明も可能となろう。

本稿が分析の対象とする説話をはじめ、歴史的書物としての物語・日記・随筆は一般に古典教材として位置づき、「読むこと」を中心に授業化されてきた。さらに本稿が考察の軸とする日本語書記史は「国語の特質に関する事項」に位置づくものの、たとえば「文字に関する事項」における漢字の音と訓のように間接的に扱われてきた経緯がある。

そこで本稿では新しい試みとして、平安中期成立の説話集『三宝絵』にみられる表記の異なる三種の本文、漢字平仮名交り文・漢字片仮名交り文・漢字文を対象に、日本語で出来事を認識する際に背後で働く論理意識の一端を考察する。

３、論理意識の実態に関する先行研究

ここでは、国語科教育学研究に影響を与えた先行研究として、日米の比較研究（社会学）と幼児の発達研究（心理学）における成果を取り上げ、子ども（幼児～小学生）を対象に、日本語話者の論理意識の実態を素描する[5]。

まず、日米の初等教育における「思考表現スタイル」の違いを論じたものに、渡辺雅子（2004）がある。渡辺は、日本の小学校 5 年生 144 人とアメリカの小学校 6 年生 82 人に「四コマ漫画の作文実験」を行い、論述の特徴からそれぞれの説明スタイルの違いを明らかにした（図 1）。結果を端的に述べると、日本の児童に多く見られたのは「時系列（時系列連鎖型）」で「一連の出来事を起きた順番に並べていくことで、それらの展開プロセスに重点が置かれ（渡辺、2004、p.24）」ていた。一方、アメリカの児童の特徴は「因果律（遡及混合型）」で「最初に述べられた一日の総括が作文全体の枠組みとなり、その後に説明される出来事は、なぜそのような評価が下されたかという理由付けの証拠として述べられてい（渡辺、2004、pp.23-24）」たと言う。具体的には以下のようなものである（渡辺、2004、p.23）。

時系列（時系列連鎖型）

けんた君はねないでテレビゲームをしていてそしたらしあいじかんまえになってしまっていそいでユニホームにきがえバスにのったところまちがえてしあいじかんにまにあわなくてせんぱつでピッチャーができませんでした。

因果律（遡及混合型）

（日本語訳）私のジョンの一日に対する意見は、一日の初めから終わりまで彼はイライラした一日を過ごしたということです。その日は彼にとってとても皮肉な日でした。まず彼はビデオゲームを長くやりすぎたので、それが悪い連鎖反応を引き起こしたのです。彼は遅く起きたので精神的にパニック状態になり、実際それが間違ったバスに乗る原因となり、それが野球の練習におくれる原因になったのです。概して言えば、彼は悪い一日を過ごしました。

日本の児童に多かった時系列連鎖型では、「～して～して」という接続語が多用され、出来事のすべてが一文で表現された。一方アメリカの児童に多かった遡及混合型では、一文での作文はわずかで、「なぜなら（because）」「だから（so）」等の接続詞が用いられたと言う。

渡辺では、このような違いが見られた理由について、授業観察（フィールド調査）をもとに日米の教育のあり方の違いから分析を行っている。

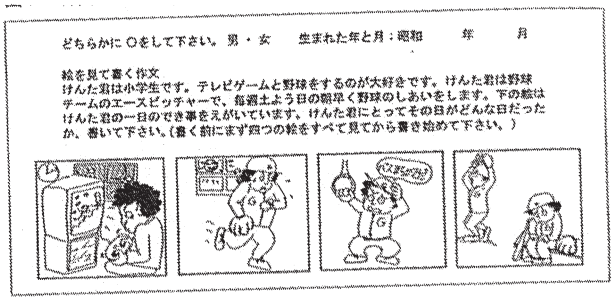

図１　四コマ漫画の作文実験（渡辺、2004）

一方、乳幼児期の言語獲得期における接続形式の獲得の側面から論じたものに内田伸子（1990a）がある。内田は、3 つの場面（ウサギが歩き、転び、泣く）を描いた絵を 2 歳と 3 歳の子どもに示し、絵を見ながら説明する際の子どもの発話を分析した（図 2）。2 歳児の発話は、「場面ごとに絵が示している出来事を擬態語を使って表現（内田、1990a 、p. 21）」し、「接続語を使って場面を関係づけることもない（内田、1990a 、p. 21）」。ところが 3 歳児になる

と、「因果や時間関係を示す接続形式（接続詞や接続助詞、動詞の連用形による接続など）を適切に使って文どうしをつなげていることにより、出来事のつながりが明確になる（内田、1990a 、pp. 21-22）」と言う。しかし、時間順序の逆に後から前へ遡って出来事をつなげて言語化することは困難である。内田（2008）では、その原因を「結果をみてその前に起こったことを遡って推測する「可逆的操作」が未成熟なため」と説明している（内田、2008、pp. 85-86）。その後、結果をみてその原因を推論する「後から前」の可逆的操作が表現できるようになるのは、5 歳後半であるとされている（内田、2008 、p. 86）。

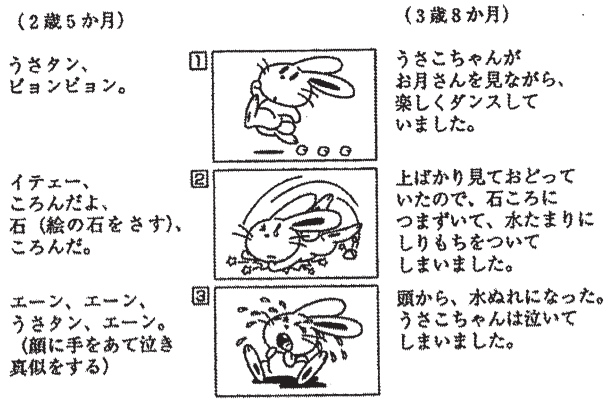

図 2　3 つの場面の物語り（内田、1990b[6]）

これらの他領域における先行研究の成果をもとに、国語教育学の領域で引き取るべき問題・課題について考察を進めた結果、本稿では以下の 2 点に辿り着いた。すなわち、なぜ日本の児童には時系列連鎖型傾向が見られたのかについての解明と、因果律に代表される論理意識はどのようにして醸成されるのかという問題である[7]。

これらの問題に取り組むための一つの手立てとして、書き言葉としての日本語の一つのスタイルが成立した時期に遡り、日本語書記の特性を明らかにするという道筋があり得るのかどうかを探りたい。

そのために、本稿では手始めに平安中期成立の仏教説話集『三宝絵』を取り上げ、接続語を中心とした日本語書記の実態を描き出す。その上で、平仮名文・片仮名文・漢字文といった表記様式の違いを越えて共有される書記のあり様から、出来事を認識する際、日本語の書き手に通底する論理意識の一端を明らかにする。そして、ここでの説話集を対象とした分析を手がかりに、今後は物語・日記・随筆といったジャンルに対して同様の分析を重ねていくことで、歴史的観点に立つ日本語書記の特性を明らかにしていきたい。本稿はそのための一考察である。

4、『三宝絵』にみる日本語書記の歴史

『三宝絵』は、平安時代中期成立の仏教説話集である。尊子内親王に撰進（永観二・984 年）された仏教入門書の性格を持つ。諸本に表記の異なる三種、漢字平仮名交り文（関戸本）、漢字片仮名交り文（観智院本）、漢字文（前田本）が存する[8]。日本語史研究においては、三本それぞれの言語特徴の解明と本文の系統性・関係性の解明が進められてきた。この『三宝絵』の言語について、宮澤俊雅（2007）は以下のように述べる。

> （古文書や古記録ならばその読みの決定が、そのままその時代の言語資料として定位されるが、）『三宝絵』の言語資料としての重要性は、あくまで一〇世紀末葉の和文体としてのそれである。本邦で一九世紀まで行われていた書き言葉に１訓読文体・和漢混淆文、２王朝和文体、３文書・候文体があり、これらが現在では一〇世紀から一二世紀にかけて時代と位相を異にしつつ定位された書き言葉であったろうことは概ね推量できるようになってきている。『三宝絵』は王朝和文体の書き言葉が確立する直前頃の言語を基礎にした書き言葉であり、一二世紀前半・一三世紀前半・一三世紀後半の三様の諸本が現在に残されているのである（宮澤、2007、p.33、下線は引用者による）。

宮澤が示すのは、日本語の書き言葉は、上記１～３の文体が、それぞれの時代に、それぞれの場や目的に応じて定位されたこと、かつ、『三宝絵』が王朝和文体の確立する直前頃の言語を基礎として書かれたものであるという点である。平仮名文・片仮名文・漢字文という三種の表記様式は、異なる時期に、異なる場や目的（構想・下書き・清書等）に応じて成立しつつも、説話文という同一の文章をつくっている。日本語表記と文章・文体（語彙・文法・表現等の言語事象）との関係においては、平仮名と和文脈、漢字と漢文脈との一定の相関性が認められてしかるべきであって、『三宝絵』もまた例外ではない。ただし、文章を構成する論理意識の観点からは、表

記様式の違いを越えて共有される言語の実態がある。こうした『三宝絵』の書記のあり様から、日本語の書き手に通底する論理意識の一端を明らかにすることができると考えた。本稿では論理意識に関わる言語表現として接続語の使用に注目し、以下の検討を行う。(1) 表記様式を異にする『三宝絵』三本は、その文章に種々の異同を持ちつつも、接続語の使用については大凡の枠組みが共有されている。(2) 古代日本語における和文調の文章では、接続詞（接続語）の使用が少ないとされる。接続語の使用状況からは、『三宝絵』の文章は漢文訓読調の文章の特徴を含む。(3) 『三宝絵』の接続表現に関わる接続語は、説話文を実現するための文脈展開／構造化の働きを持つ。

先に宮澤（2007）でも触れられていたように、平安時代における書き言葉は、文体間に位相的な違いが認められるものであった。たとえば築島裕（1963）（1969）では、平安時代における漢文訓読資料と和文資料それぞれにおいて語彙調査を行い、同じ意味を表す語が漢文訓読語と和文語との間に対立的に見いだされることを指摘している。こうした文体的特徴は、文字使用の問題とも関連づけられ、漢文訓読語の使用を見る漢字文・漢字片仮名交り文と和文語の使用を見る平仮名文という表記様式と語彙や文法等の言語的特徴との間の相関性として捉えられることがある。『三宝絵』においても、

○コヽニアキラカニシリヌ此夢殿ニ入給ヘリシオリノ事也（観智院本・中巻 12 丁裏 8 行目）
○あきらかにしりぬかのゆめとのにいりたまへりしほとのことなりけり（関戸本・中 22 裏 1）
○明知入彼夢殿之間事也（前田本・中 4 裏 7）

のように、同文的箇所において、語彙選択上の異同が見られる。（ここでは、「コヽニ」の有無、「オリ／ほど／間」や「也／なりけり／也」）これらは表記や用語の問題として、各表記様式の言語の独自性を特徴づける材料となり得る。『三宝絵』の三種の表記様式は、それぞれの享受の場・文章作成の目的に応じた文体特徴を備えていると考えられ、現代語においても和文調／漢文調・口語調／文語調の文体選択の歴史を背景として、目的や場に応じた文体選択意識が働くこととなっている。

しかし、本稿の一つ目の目的は、こうした異なる表記様式が複線的に展開する中で、文章を書くこと＝書記日本語を用いて思考すること、ここでは尊子内親王への仏法の解説[9]がどのような形で実現していたかを明らかにすること、加えてそうした文章ジャンル（ここでは説話文）に特有の書記のあり様＝論理意識が表記様式の違いを越えて共有されていることを示すことにある。そこで、仏教説話／仏教解説書としての『三宝絵』の書記のあり様の特徴を知るために、諸本に共通の言語的特徴を探ることとし、今回は文章の展開／構造化に関わっていわば文章の骨組みをつくる接続語の使用について、三本の比較を行うこととする。

5、『三宝絵』における論理意識

5、1　異本間で共有される接続語の枠組み

ここでは接続詞相当の語を用いる接続表現（ここでは接続語と呼ぶ）の分類を試みた。本文の欠落の無い観智院本を基準に、使用される接続語とその用法を概観すると以下のようになる[10]。

Ⅰ　語の接続
〈並立〉…オヨビ（及）・ナラビニ（并）
Ⅱ　句の接続
〈並立〉…オヨビ（及）・ナラビニ（并）
Ⅲ　文の接続
（1）順接
〈添加〉…マタ（又）
〈補説〉…タダシ（但）
〈確定条件〉…コレニヨリテ（因之・依之・依此）・ヨリテ（仍）
〈継起〉…スナハチ（乃・即・則）
（2）逆接 …シカレドモ（然而）
（3）転接 …シカルニ・シカルヲ（而）
（4）発語 …ココニ（爰）・ソモソモ（抑）・トキニ（于時・時）

一般的には日本語における接続詞は、古代語においては指示語系統のものが中心で、質・量ともに乏しいとされる。その中にあって「漢文訓読調の文章」では接続詞の使用が認められ、特に漢文の訓読に際して漢語接続詞の翻訳から日本語に取り入れられた訓読語系の接続詞は、和漢混淆文での使用を経て、その後の文章語に影響を与えた。

表『三宝絵』三本の同文的箇所における接続語の使用[11]

語	前田本	観智院本	名博本	巻・話
オヨビ	及	ゑ	―	上4
	及	ゑ	―	上6
	及	及ヒ	―	上13
	及	ヲヨヒ	―	下4
	及	及ヒ	およひ	下7
	及	及ヒ	およひ	下13
	ゑ	ヲヨヒ	―	下26
ココニ	ゑ	爰	―	総序
	ゑ	コヽニ	ゑ	中1
	ゑ	爰ニ	ゑ	中1
	ゑ	コヽニ	―	中1
	ゑ	爰ニ	ゑ	中2
	ゑ	爰ニ	―	中2
	是	爰ニ	―	中3
	ゑ	コヽニ	ゑ	中5
	爰	爰ニ	こゝに	中5
	ゑ	コヽニ	―	下20
	爰	爰ニ	―	下26
コレニヨリテ	因之	因茲	―	総序
	因之	此レニヨリテ	―	総序
	因之	コレニヨリテ	これによりて	中1
	依此	是ニヨリテ	これによりて	下1
	依之	コレニヨリテ	―	下2
	因之	是ニヨリテ	―	下6
	因之	是ニヨリテ	―	下8
	因之	コレニヨリテ	これによりて	下9
	因之	是ニヨリテ	―	下19
	因之	コレニヨリテ	―	下20
	因之	コレニヨリテ	これによりて	下20
	因之	コレニヨリテ	―	下23
	因之	コレニヨリテ	―	下23
	因之	コレニヨリテ	―	下26
	因之	コレニヨリテ	―	下27
	因之	コレニヨリテ	―	下28
シカルアヒダ	ゑ	然間	―	中3
シカルニ シカルヲ	而	而ヲ	しかるに	中1
	ゑ	而ニ	ゑ	中6
シカレドモ	然	然而	―	総序
	然而	ゑ	ゑ	上8
	然	シカレトモ	しかれとも	下9
	然而	シカレトモ	―	下20
スナハチ	即	則	―	上7
	即	即	すなはち	上8
	則	則	―	上9
	則	即	―	上13
	則	即	―	上13
	即	即	すなはち	中1
	則	即	すなはち	中2
	即	即	―	中3
	即	即	―	中3
	則	即	―	中3
	ゑ	即	ゑ	中3
	ゑ	即	すなはち	中6
	則	即	すなはち	中8
	ゑ	即	ゑ	中11
	即	即	すなはち	中12
	則	即	―	中13
	ゑ	即	すなはち	中14
	ゑ	即	すなはち	中17
	則	即	すなはち	中17
	則	即	すなはち	中18
	則	即	すなはち	中18
	則	即	―	下3
	乃	即	―	下4
スナハチ	乃	即	―	下4
	則	即	―	下7
	乃	即	―	下10
	乃	スナハチ	―	下11
	乃	即チ	―	下13
	則	即チ	―	下15
	乃	スナハチ	―	下22
	乃	スナハチ	―	下22
	則	即	―	下28
	則	即	―	下30
	則	即	―	下30
	則	即	―	下31
	ゑ	即	―	下31
ソモソモ	ゑ	抑	そもゝゝ	中序
	ゑ	抑	そもゝゝ	中4
	抑	又	又	中15
	抑	抑	そもゝゝ	中18
	ゑ	抑	―	下3
	抑	ソモヽヽ	―	下6
	抑	抑	―	下16
	抑	抑	―	下24
	抑	抑	―	下28
	抑	抑	―	下30
	ゑ	抑	―	下31
タダシ	但	但シ	―	上8
	唯	但シ	―	上10
	唯	但	―	上12
	但	但	たゝし	中11
	但	タヽシ	たゝし	中14
	但	タヽシ	たゝし	中14
	但	但	たゝし	中15
トキニ	于時	于時	―	総序
	于時	時ニ	―	上1
	于時	ゑ	ゑ	
	于時	時ニ	ときロ	上3
	于時	ゑ	―	上4
	于時	時ニ	―	上4
	時	于時	―	上4
	時	時ニ	時に	上8
	于時	ゑ	―	上11
	于時	時ニ	―	上13
	于時	于時	―	上13
	于時	是ノ時ニ	―	上13
	于時	ゑ	ゑ	上13
	ゑ	時ニ	ゑ	中1
	又	時ニ	又	中1
	ゑ	時ニ	―	中1
	爰	于時	ときに	中3
	于時	時ニ	―	中3
	于時	ソノ時ニ	ときに	中8
	于時	コノ時ニ	ときに	中8
	于時	ゑ	こゝに	中9
	于時	時ニ	ゑ	中13
	于時	時ニ	ゑ	中17
	于時	時ニ	ときに	中17
	于時	時ニ	―	下15
ナラビニ	ゑ	并	―	中3
	ゑ	并	又	中4
	并	并	―	下12
	并	并	―	下20
	與	并	―	下27
	ゑ	并	―	下28
	并	并	―	下30
ヨリテ	仍	ゑ	―	上1
	仍	ゑ	―	上9

一方『三宝絵』の接続表現にも、和漢混淆文や和化漢文に認められる接続語が使用されていることがわかる[12]。また全体としては、語と語あるいは句と句の接続よりも、より長い文（文章）の単位に働きかける接続語が使用され、文章の展開を支えている。以下、観智院本によって用例・所在（巻数・丁数・表裏・行数）を示す。

①十千ノ天使來テ流水カ臥セル四ノ側ニ各ノ十千ノ玉玉ヲ置ク合テ四十千也又天ノ花ヲ雨ル事積レル高サ膝ニ至ル　（上21オ4）

②タヽ願主ニシタカフユヘニコノ座ニノホル也但ネヌルヨノユメニシメサルヽコトアリトテソノユメヲカタル　（中32オ1）

③願ハ此木ヲモチテ十一面觀音ニツクリタテマツラムトシカレトモユクヘキタヨリナクシテ　（下47ウ1）

さて、これらの接続語は一部を除けば表記の異なる『三宝絵』諸本間で共通に使用されていることが分かる。表に示すのは、接続語が見られる『三宝絵』の同文的箇所を対照した結果である[13]。当該語の有無と表記レベルの差異を捨象した用語からは、三本間で接続語のおおよその枠組みが共有されている実態が看取される。『三宝絵』では、三本の表記とそれに対応して用いられる用語（訓読文体／和文体の違いに関わる語彙選択）を越えて、訓読語系の接続語が文章展開に共通に関わっていることが分かる。

５、２　接続語の使用傾向と論理意識

つづいて、説話文としての『三宝絵』に特徴的な論理意識について考察するために、「文の接続」に関わる接続表現のうち〈継起〉〈確定条件〉〈発語〉を取り立て、説話の展開および構造化の観点から明らかにしてみたい。

接続語の使用傾向は説話の文章内容とその性格、語り方という点に関わっており、出現と文章内容とに相関性が認められる。『三宝絵』は上巻・中巻が人物等を中心に据えて、その事蹟を「物語る」内容であるのに対して、下巻が経典等からの引用や物事を「記述する」巻となっている。

例えば、全巻に渉って使用される接続表現には、〈継起〉がある。これは、前件を承けてそのことによって生起する結果を示すものであり、接続語による表現では「スナハチ」が使用される。

④狩人袈裟ヲ脱キテ刀ヲ以テ師子ノ皮ヲ波木ツ悦ヒ荷テ家ニ返ヌ即國王ニ奉ツリタレハ　（上23オ7）

⑤オトロキ問ニツフサニ件ノ事ヲ申即オホキニタウトヒカナシヒテ国内ニ知識ヲトナヘテ是ヨリハシメテチカラヲクハヘテ其法花経ヲ書タテマツリテ　（中41ウ8）

これらは、接続語の用法的には「順接」であって、地の文において説話内の物語時間の流れに沿って継

起的に物語る箇所[14]に多く使用される。

つぎに、〈確定条件〉は前件と後件とを因果関係で結ぶものであり、ここでは「コレニヨリテ」が使用される。序文（2 例）・中巻（1 例）・下巻（13 例）と出現に偏りがみられる。

⑥蘇我大臣佛法トイフコトヲタウトヒウヤマフコレニヨリテヨノ中ニ病オコリテ民皆タヘヌヘシ（中 7 オ 9）

⑦栴檀香ヲモチテソノウヘニマメシチラシテ願ヲオコシテサリヌ是ニヨリテ九十一劫悪道ニオチス（下 19 オ 5）

⑧生死海ノ船涅槃ノ山粮也ト讃給ヘリ因茲婆羅門暫程酔テ僧形ニ成カハ此故ニ後ニ法ヲ聞キ（上 2 ウ 2・序文）

「順接」の接続表現となる点は先の〈継起〉（スナハチ）と同様である。ただし、〈確定条件〉は事柄の出来や変化について、「出来事」や「状況」をそれが起きる順に並べることによって、事柄の出来や変化が起きた原因を説明しようとするものである。〈継起〉が時間軸に従って「物語の筋」を展開させる表現であるのに対して、〈確定条件〉は時間軸に従いつつも、前件と後件との関係性について接続語を用いて出来事の原因を説明する意図が介在する表現である点に違いがある。

最後に〈発語〉は、所論を説き起こしたり、話題を始めて提示したりするもので、「ココニ」[15]「トキニ」が使用される。「トキニ」は上巻・中巻、「ココニ」は中巻に多く使用される。

⑨忍辱仙人ト云人有キ城コノ邊リノ林ノ中ニ住ム時ニ國王有リ歌利王ト云フ（上 11 ウ 4）

⑩ソコニシテ三十年ヲヘヌコヽニ沙弥徳道トイフ者アリ（下 48 オ 5）

⑪トモニ宮コニノホリ給ヌ爰ニ知ヌ行基ハ是文殊ナリケリト（中 22 ウ 3）

〈発語〉は、先の二つの接続表現とは異なり、前文を直接受けて後文に続けるというよりは、説話全体において後続部がどのような位置づけで続けられるかという関係を示している。つまり、「いつ・どこで・だれが・どうした」といった説話の要素を文章に組み込み説話の構造を形作る働きを担う接続語である。「トキニ」では、時間軸に沿った物語の展開を一端断ち切って、その後の展開の中心となる人物・事柄を持ち込んで新たな文脈が作られる。「ココニ」の場合も基本的には同様（用例⑩）であるが、作られる新たな文脈は物語の筋を展開させるだけではなく、説話の主題に関わる語り手側の判断や評価を持ち込む場合もある（用例⑪）。この点、〈継起〉〈確定条件〉が物語内時間の文脈に沿った展開を形作る接続表現であるのに対して、〈発語〉は物語の時間軸の外側から、一貫した「仏教の入門テキスト」としての説話全体を作る働きを担う接続表現であると考えることができる。

５、３　日本語書記史における『三宝絵』の接続表現

以上みてきたように、『三宝絵』では説話の文脈・構造化において接続語が関わる表現を採る点にその特徴を見いだすことができた。この特徴は、平安中期以降の和文に見られるような接続助詞等を使用して、比較的長い文を重ねる接続・展開の方法と顕著な違いを見せる。たとえば、平安和文に見られる接続詞は非常に少なく、接続詞の使用が認められるとしても、前の状態が後の事態にも続くことだけを述べたり、前の状態と後の事態が直接関係していないことだけを述べたりするものが大半を占めているということが指摘されている。また、文が独立した単位として認識されやすく、文と文相互の関係性が示される傾向にある漢文訓読文に対して、平安和文は意味的に後続文と一体化して解釈することが妥当な「従属節的文」が多く認められ、このことが長い文を重ねる和文の文章展開の特徴であることも明らかにされている[16]。こうした文連接のあり方については、従来、平安和文と口頭言語の世界との近さに要因が求められてきたが、福島（2008）では、口頭言語を「言語表現内の情報完結度が低い（福島、2008、p.36）」言語変種と規定した上で、対面する相手との間で共有される文脈に依存する度合いが高い点からの説明を試みている。

一方、『三宝絵』の接続表現はこれら平安和文の特徴とは反対の実態を示しており、文と文とを繋げる際に、前件と後件や一文と説話全体との意味的・論理的な関係性を接続語によって明示する文章展開や構造化が、漢文訓読文的な接続のあり方と用語・用法上の重なりを見せる。それは同時に、眼前の状

況とは切り離された所で成立する「言語表現内の情報完結度が高い（福島、2008、p.37）」文章として『三宝絵』の語り・文章構造がコントロールされたものであることを示す。つまり、「王朝和文体の確立する直前頃の言語」と位置づけられる『三宝絵』の言語は、和文体においてもその基盤に漢文訓読文体の文章展開の特徴を持つものであることが分かる。ここから、『三宝絵』における接続表現には説話をいかに語るかという点に関わる論理意識を見てとることができる。（1）〈継起〉「スナハチ」は、説話内の物語時間の流れに沿って継起的に物語る。（2）〈確定条件〉「コレニヨリテ」は、単純な事態の羅列ではなく時系列的な展開に原因を付加して説明しようとする。（3）〈発語〉は、時間軸に沿った展開を一端断ち切って新たな文脈を作るものであって、前文と後続文との直接的な繋がりから一歩引いた視点で、文章全体における後続文のあり方を示す。このうち「トキニ」が説話の筋の展開の新たな文脈を作るのに対して、「ココニ」は主題に関わる語り手側の判断や評価を持ち込むこととなる。

６、日本語話者に通底する論理意識

以上のように、本稿では『三宝絵』を対象に接続表現に着目して分析することで、表記様式の違いを越えて共有される書記のあり様を考察してきた。この結果から、出来事を認識する際に背後で働く論理意識を観点に、直前のまとめ（1）～（3）をまとめ直すと以下のようになる。（1）時系列による物語り（2）時系列に沿った「出来事とその原因」の言及（3）時間軸を断ち切った文脈の持込の３つである。

（1）に関わる問題については、先行文と後継文とが単純に接続する平安和文の特徴が、口頭言語に連なる特徴を示している点で示唆的である。本稿の３、において、渡辺（2004）を引用し、日本人の子どもの作文例を取り上げた。その際指摘された時系列連鎖の特徴と共通するものとして、平安和文の文連接のあり方が挙げられる。日本の児童に多かった「～して～して」という接続語の多用、及び出来事のすべてが一文で表現される特徴は、平安和文の特徴とも共通している。また、『三宝絵』においても〈継起〉の分析からこうした思考スタイルを確認できた。このような接続のあり方は、文脈を共有する相手への依存度が高いとされる一方で、『三宝絵』においては、時間軸に従って「物語の筋」を展開させるための接続表現として寄与していた。

また（2）については、『三宝絵』における〈確定条件〉の分析で明らかとなったように、単純な事態の羅列ではなく、時系列的な展開によって出来事の原因が説明されていた。ここに、和文体成立期の説話文における「原因／結果」という論理意識の一端を見ることができよう。注目したいのは、その際の因果は遡及型ではなく、時間的経過に沿って「原因→結果」の順に示される点である。先に挙げた渡辺（2004）におけるアメリカの児童の作文例と比較すると、そこから「主張」を除いたスタイルとの共通性が確認できる。主張の有無という観点から言えば、『三宝絵』の接続語が担う接続表現においては主張・結論の記述は決して多くはなく、(3) における「ココニ」においてその萌芽が確認できる程度である。

その（3）については、時間軸に沿った展開を一端断ち切って新たな文脈を作るものとして、文脈を立ち上げるものと、語り手の判断・評価を持ち込むものがあった。時間軸を断ち切るという点で、時間の流れに沿った出来事の叙述から解放され、説話内の物語をメタ的に語ることが可能となっている。その結果、「ココニ」における用例のような主張・結論につながる表現が確認できたものと予想される。

さらに（1）～（3）の結果が特に興味深いのは、書き言葉としての説話文の成立時におけるこれらの日本語書記の実態が、先に挙げた内田（2008）における日本語話者の乳幼児期における言語実態と近似性を持つ点である。図３で示すように、内田では乳幼児期の「物語行動」の発達段階を「断片的報告」「出来事の統合（筋の展開）」「筋の一貫性」の順で整理している（内田、2008、p.86）。今回の分析における（1）は「断片的報告」から「出来事の統合（筋の展開）」のあたりに、また（2）は「出来事の統合（筋の展開）」（3）は「筋の一貫性」に近い性格のものであることが言及できる。また、「第一次認知革命」としての「前から後ろへの推論（原因→結果）」についても（2）との近似性が確認できる。

このことは、書き言葉としての日本語の一つのスタイルが成立した時期における日本語書記の実態が、現代日本語の乳幼児期の言語獲得期における実態と近似性を持つことを示している[17]。この近似性を根拠に、十分とは言えないまでも、本稿では（1）～（3）の分析結果として、日本語話者にとって採りやすい思考のあり様の一端を描き出すことができた

と考える。その上で、日本語話者に適した思考のあり様について、これも十分ではないが、主張・結論の記述の有無に関わっては、日本語の書き手が出来事を認識する際、構築される論理的思考の大半が「主張／理由」ではなく「原因／結果」であるという点が見えてきた。日本語話者は「原因／結果」の論理を主軸として思考していくことに長けているといった傾向を見出すことができる。

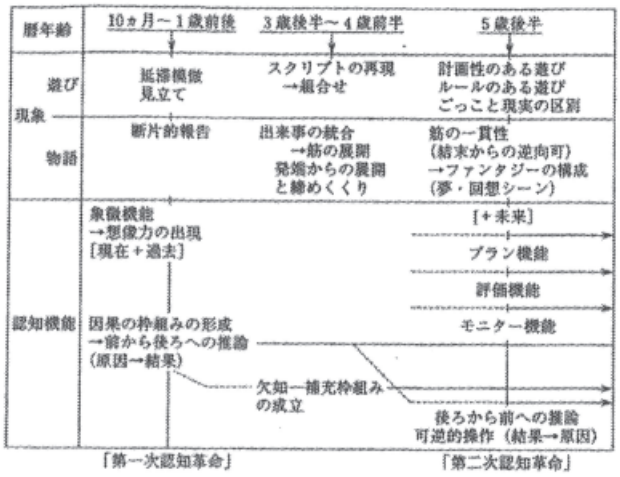

図3　物語行動の発達を支える認知革命[18]

7、研究の成果と課題

本稿では、歴史的観点に立ち、複数の表記様式を越えて共有される書記のあり様を分析することで、出来事を認識する際、日本語話者に通底する論理意識を考察し、日本語話者にとって採りやすい思考のあり様を追究してきた。その結果、日本語で思考を行う者に通底する上記（1）～（3）の思考のあり様を明らかにするに至った。また、日本語の書き手にとって、「原因／結果」の因果律が、「主張／理由」との比較において、より円滑な思考のあり様としてあるといった傾向を見出すに至った。このことは、日本語を用いて思考を行う者にとって採りやすい思考のあり様の一端を、日本語書記史記述という道筋から究明した一つの試みであると位置付けられよう。つまり、論理的思考力といった国語科の教育内容を考察する際の、日本語書記史という観点の有効性の一端を示すことができたと考える。以上が、本稿における成果である。

今後は、ここでの説話集を対象とした分析を手がかりに、物語・日記・随筆といったジャンルに対して同様の分析を重ねていくことで、歴史的観点に立つ日本語書記の特性を明らかにしていきたい。その上で、日本語話者に通底する論理意識の解明を進めていきたいと考える。

［注］

[1]「書記」は小松英雄（1998）によって提唱された概念であり、「書記」と「表記」の関係性は次のようにまとめることができる。表記…書記と言語との間に高度の可逆性があるもの／書記…社会慣習に従って文字を組み合わせ、情報を記録して蓄蔵したもの

本稿では、視覚的な言語記号の運用面の解明に資する術語として多く用いられる「表記（文字）」ではなく「書記」を採用する。

[2] 吉川芳則（2013）を参照。

[3] 国語科教育におけるトゥールミン・モデルの受容については、幸坂 健太郎（2010）を参照。

[4] 河野順子（2006）を参照。

[5] 萩原稚佳子（2009）における会話を対象とした「意見述べにおける日本人の論理展開」の考察など、言語学の一潮流である異文化間コミュニケーションの分野においても研究の蓄積がある。本稿では説話を取り上げることから、物語り性を包含した渡辺雅子（2004）を取り上げている。

[6] ただし、引用は内田伸子（2008）p. 82 による。

[7] 関連する先行研究にレトリック研究（例えば柳澤浩哉（1993）等）の分野がある。

[8] 漢字平仮名交り文＝名古屋市立博物館（旧関戸家）蔵本［保安元（1120）年写］及び東大寺切、漢字片仮名交り文＝東京国立博物館（旧東寺観智院）蔵本［文永十（1273）年写］、漢字文＝前田尊経閣蔵本［正徳五（1715）年写、寛喜二（1230）年本の忠実な書写］が存する。本稿では、諸本について、名古屋市博物館蔵本および東大寺切を総称して「関戸本」、東京国立博物館蔵本を「観智院本」、尊経閣蔵本を「前田本」と称する。

[9] 渡辺実（1981）では、文章の内容面から検討を加え、原典には無い作中人物の心情の言語化・明示化が認められることを指摘している。

[10] 接続表現の分類については、峰岸明（1986）「変体漢文の文法」（国語学叢書 11『変体漢文』東京堂出版）を参考にし、「継起」については私に採用した。また、文章の論理的関係の全容を明らかにするためには、接続語に限らず、文脈を形成する文と文、あるいは文章と文章の接続関係全体を対象とする必要がある。本稿では、まずは異なる表記様式に通底する書記の実態を明らかにすることを第一の目的と

し、接続語使用の実態を示した。

[11] 磯貝（2014）を参照。

[12] 築島（1963）および（1969）を参照。

[13] 表中の「－」は対照箇所が欠文であることを、「∅」は文中に当該語が無いことを示す。

[14] 浜田（2001）では、物語の持つ時間性に焦点をあて、「発話部」「前景部」「背景部」「コメント部」の四層構造に分類する。

[15] 「ココニ」は前田本（漢字文）の使用が少なく、観智院本（漢字片仮名交じ文）での使用が多い。「接続語の枠組みの共有」という点からは問題を残す。日本語文における訓読語系の接続語の使用を考える上では、漢字文／漢文体からの直接的な影響だけでなく、漢字片仮名交り文／和漢混淆文体における使用の拡大過程を考慮に入れる必要があるが、今はその準備が無い。今後の課題としたい。

[16] 福島（2008）を参照。

[17] このことは、今回の平安時代の言語の実態をそのまま現代の日本語話者の実態と結びつけることを意味しない。たとえば、近代における西欧からの文章作成法の影響や学校教育が果たした役割を考慮に入れた上で、今回の考察を通時的に結びつけることが今後の課題である。ただし、今回対象としたような漢文脈的な思考に基づく書記の有り様は、宮澤（2007）が示すように日本語の書記様式の一つとして近代の日本語文に流れ込んでいると考えられる。

[18] 内田（2008）の図注として、「内田（1996）を改変」とある。

＊本研究はJSPS科研費JP16H03794の助成を受けたものである。

［引用文献］

磯貝淳一（2014）「前田本『三宝絵』の文体―「漢字仮名交り文の真名化」の意味を問いなおす―」（広島大学国語国文学会、2014年7月12日、広島大学）口頭発表資料

井上尚美（1998）『思考力育成への方略―メタ認知・自己学習・言語論理―』明治図書

内田伸子（1990a）「第Ⅰ章　言語と人間」内田伸子編『新・児童心理学講座　第6巻　言語機能の発達』金子書房

内田伸子（1990b）『想像力の発達―創造的想像のメカニズム―』サイエンス社

内田伸子（1996）『子どものディスコースの発達―物語産出の基礎過程―』風間書房

内田伸子（2008）「文章産出過程でのメタ認知の働き―物語の産出過程での「内なる他者の目」の発達」丸野俊一編「【内なる目】としてのメタ認知『現代のエスプリ』12月497号、至文堂

萩原稚佳子（2009）「意見述べにおける日本人の論理展開についての一考察」『明海日本語』第14号

小松英雄（1998）『日本語書記史原論』笠間書院

佐久間まゆみ（1992）「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要　文学部』41

河野順子（2006）『〈対話〉による説明的文章の学習指導―メタ認知の内面化の理論提案を中心に―』風間書房

吉川芳則（2013）「説明的文章の領域における実践研究」全国大学国語教育学会編（2013）『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』

幸坂 健太郎（2010）「国語科教育におけるトゥルミン・モデルの受容についての批判的検討 」広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座『論叢 国語教育学』復刊1号

中央教育審議会教育課程部会（2015）「教育課程企画特別部会 論点整理」教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）、2015年8月26日

築島裕（1963）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

築島裕（1969）『平安時代語新論』東京大学出版会

浜田秀（2001）「物語の四層構造」『認知科学』Vol. 8、No.4 日本認知科学会、共立出版

福島直恭（2008）『書記言語としての「日本語」の誕生―その存在を問い直す―』笠間書院

馬淵和夫（1997）「三宝絵解説」『三宝絵 注好選』新日本古典文学大系31、岩波書店

峰岸明（1986）「変体漢文の文法」国語学叢書11『変体漢文』東京堂出版

宮澤俊雅（2007）「三宝絵諸本研究と尊経閣文庫所蔵『三宝絵』」尊経閣善本影印集成41-1『三宝絵』所収

柳澤浩哉（1993）「トポスによる説得的言論分析の試み―近松におけるロゴスの意味―」日本研究研究会『日本研究』8号

渡辺雅子（2004）『納得の構造　日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社

渡辺実（1981）「解説の文章―三宝絵詞」『平安朝文章史』東京大学出版会